

飽和消費と貨幣

～ケインズ経済学とシュンペーター経済学の融合を目指して～

泉 宏明 (広島 Elpida)

キーワード 飽和消費 貨幣 流動性プレミアム 技術革新 プロセスイノベーション
プロダクトイノベーション 姥捨て

1.序) 現在の主流派経済学は、新古典派経済学であるとされている。しかし、新古典派のよりどころとするアロー・ドブリューの一般均衡解の存在証明は、ドブリューの『価値の理論 丸山徹訳』をよく読むと、次のようなトートロジーを含んでいる。

「4.5 選好の非飽和消費の仮定 (a) 第 i 消費者にとって、飽和消費は存在しない。すなわち、(X_i における) 彼の消費がどのようなものであれ、第 i 消費者にとってそれよりも選好される (X_i における) 他の消費が存在する。」(邦訳 92 頁) これを裏返せば、飽和消費の存在を仮定すれば、一般均衡解は存在しない場合もありえるのである。新古典派は消費者に無限の欲望があるとする。

最近、日本経済は携帯電話・デジタルカメラ・DVD・薄型テレビの商品開発及び中国経済の目覚ましい消費の伸びによって一息ついた感もあるが、「バブルの崩壊」と呼ばれた、出口の見えない不況が 10 年以上も続いた。私が思うところは、この不況の原因は、結果からみても、メガヒットと呼ばれる商品が出てこなかったことが大きな要因であろう。多くの経済学者が指摘するように、シュンペーターの「新結合の遂行」は資本主義経済にとって、大きな原動力である。(但し、シュンペーターは、「プロセスイノベーション」と「プロダクトイノベーション」の区別を行っていないが、この二つは、経済社会に与える影響は違う。) また、日本の論壇を見ると、生粋のケインズ経済学者である、吉川洋先生の需要制約 (S 字需要曲線) =飽和消費理論や小野善康先生の飽和することの無い貨幣への守銭奴 (但し、私自身はこの言葉はあまり好きではない。) 的欲望があるがために、商品購入に貨幣がまわらないという理論が、少しずつ影響力を持つようになった。(但し、本稿においては、「貨幣」という言葉に、株等の概念も含んで使う。)

本稿は、今まで私の展開した理論 (泉の文献を参照のこと) に貨幣を導入することによって、より洗練されたものにし、ケインズ経済学とシュンペーター経済学を融合し新しい経済学の構築を試みるものである。

2. ケインズ経済学とシュンペーター経済学の融合

最近、ケインズ経済学とシュンペーター経済学の融合の必要性は、時々見受けられるようになった。私が知るところでは、岩井克人先生の『二十一世紀の資本主義論』に納められている、『IV 経済学をめぐって ケインズとシュンペーター』(初出 1985 年) がまず挙げられる。ここに引用する。

「創造的破壊を通して発展していく資本主義に固有の不安定性の根源に、それ自身何の

実体的な要因にも還元できない<差異>の創造と消滅をめぐる個別企業同士の競争過程を見出したのは、シュンペーターであった。他方、企業の設備投資の不安定性の根源に、本来は資本が生み出す利潤に対する所有権の表象でしかなかった株式が<商品>化され投機の対象になったことを見だし、また貨幣経済そのものの本質的な不安定性の根源に、本来は商品と商品との交換を媒介する手段でしかない貨幣があたかもひとつの<商品>であるかのようにひとびとに保有されることによる実体部門と貨幣部門の相互干渉を見出したのがケインズであった。実体を欠いた差異そのものの商品化を基軸とする現代の資本主義—それは、まさにこのようなシュンペーターの世界とケインズの世界が融合した世界にほかならない。その意味で、わたしはまさにこの現代においてこそ、批判すべき点を多く見いだしながらも、百年以上も前に生をうけたこの二人の経済学者の思考にたえず戻っていく必要を感じているのである。」(205頁～206頁)

また、生粋のケインズ経済学者である吉川洋先生は、『構造改革と日本経済』において、「さて個々の財・サービスに対する需要が必然的に鈍化するとしたら、一国経済の成長はどのようにして維持されるのであろうか。それは需要の伸びの大きい新しい財・サービスが次々に生み出されるからである。図3-4はこうしたメカニズムをイメージ的に表したものだ。青木正直教授と著者は、経済成長にとって最も基本的といえるこうした事実を明示的に分析する成長モデルを考えた。このモデルで経済の成長率を最終的に決めるものは、図3-4において新しいS字曲線を生み出すイノベーションである。このモデルのスピリットを一言で表現すれば、ケインズとシュンペーターを足して二で割ったものということになるであろう。」(90頁～91頁)と述べ、ケインズ理論の「需要」→「生産」という因果の流れ及び「需要制約」を打ち破るシュンペーター経済学の「新結合の遂行」の重要性を認識し、この二人の経済学の融合の必要性を述べられている。

ここで、本稿の見解を先取りすると、「なぜ、好況の後に不況が必ず来るのか？」の答えは、「貨幣がまだ信用」(=ケインズの言う「貨幣の持つ流動性プレミアム」が存在している)され、かつ「競争社会の中で、積極的にプロセスイノベーションが行われる」(=シュンペーターの言う、「新結合の遂行」の内プロセスイノベーションが積極的に行われる)からである。また、「大恐慌がなぜ現れるのか？」の答えは、「貨幣が信用されなくなった」(=岩井克人先生や小野善康先生が指摘しているように、「貨幣」価値が0になり、「流動性プレミアム」が全くなくなった)からである。

私の「一元的生産様式から多元的生産様式への発展」(『資本主義の生成』泉の論文参照)という歴史理論の叙述から始まり、まず辿り着いたのが、新古典派の暗黙の了解であった「飽和消費の非存在」の裏返しである「飽和消費の存在」=穀物の過剰生産により封建制が崩壊したという理論であった。また私の歴史理論を理論武装するために導入した経済理論、シュンペーターの「新結合の遂行」による「多元的生産様式の深化」という旅路も、ケインズ的な貨幣を導入することによって、一つの帰結に辿り着くのではという感覚を持ちながらこの論文を完成させている。

3.貨幣の役割

貨幣の役割は、主に以下の2点であろう。

- ① 交換を効率的に行う。
- ② 富貯蔵手段としての貨幣（異時点間の交換の媒介物）

「要求の二重の一致」という交換手段としての貨幣の役割は分かり易い。更に、岩井克人先生は、『二十一世紀の資本主義論 無限性の経済学』の中で、サミュエルソンの「世代重複モデル」を説明している。人間には「若年期」という消費財を作ることができる期間と、「老年期」という労働を行うことができない期間の二つが存在するとする。もし「貨幣」というものが存在しなければ、「老年期」の老人は、「若年期」の労働に対して、既に何の見返りも与えることができない。社会倫理も社会契約も存在しない純粋な自由放任経済においては、「姥捨て」が当たり前のこととなる。しかし、「貨幣」を導入すると、問題は解決する。「貨幣」は今期の消費財と来期の消費財との間の交換を媒介する機能を果たす。つまり「貨幣」は、ひとつの社会契約なのである。

資本主義の成立以前の社会においては、身分制と血縁関係が社会秩序の大きな部分を占めていた。王は身分制により一生働かずに過ごせることを約束され、また底辺の老人でも、自分の子供によって老後を養ってもらった。身分制と血縁関係（氏族関係）が崩れた現代社会において、「老年期」と「若年期」を結ぶ「貨幣」の「異時点間の消費の媒介物」という役割の維持は、社会を秩序付ける重要な問題である。

『一般理論』の中で、ケインズを揶揄するために引用される「穴掘人」の話（邦訳 128 頁）の後に次のようなことが述べられている。「古代エジプトはピラミッド建築と貴金属の探索という二つの活動をもっていた点で、二重に幸せであり、伝説にまでなったその富は疑いもなくこのためにできたものであった。これらの活動の果実は、消費されることによって人間の必要性を満たすものでなかったから、過剰によって価値が下がることがなかった。」（邦訳 131 頁）この叙述と岩井先生の「姥捨て」を考えてみると、古代エジプトのように「身分制」で守られた社会においては、王は、剰余労働を次の世代に残すことを考える必要もなく、自分のステータスのシンボルとして、全ての剰余労働を使ってピラミッドを建築できた。労働の苦痛はあるかもしれないが、失業の心配は無い時代であった。封建制が崩れ、資本主義が始まり、身分制・氏族関係から自由になったときから、人は自分の老後を「貨幣」の「異時点間の分配」の機能に委ねることしかできなくなった。

本稿は、この「貨幣」を導入するとどのようなことが起きるのかを解明するものである。この先駆的業績は、小野善康先生の守銭奴的「貨幣愛」の理論化であり、本稿もこのフレームワークを使う。但し小野先生の「貨幣愛」をもっと聞こえの良い言葉で言えば、将来何があるか分からず、また子供にも恵まれた環境を与えてやりたいがために、自分が現在所有している財産を、或る商品の消費の効用がわずかしか増加しない、または絶対的飽和の状態にあるときに、将来必要となるかも知れない=もっと効用が増加するかも知れない財の開発を待つために、「現在の消費に特に必要性を感じていないため、さしあたって貨幣(=

流動性プレミアムを持つ)を保持しておこう」とする行動があるということになる。資本主義成立以前の身分制の役割を、資本主義社会においては、「貨幣」が担っているのである。

4.貨幣の導入 (小野善康先生の理論の復習その1)

まず、ある商品を購入するという行為において、「消費財」の効用関数とともに、「貨幣」の効用関数を導入する。貨幣の効用とは、異時点間の分配の期待値である。

ある商品を c 単位購入する。 $(c \times \text{物価水準 } P \text{ が購入金額})$ この効用を、 $u(c)$ で表す。

現在の消費者の貨幣残高が M であり、 M を物価水準 P で割り、このときに c 単位の商品を購入するときの貨幣の効用を、 $v(M/P - c)$ とする。

消費者の商品を c 単位購入するときの「貨幣」も含めた効用 **Total** は、

$$u(c) + v(M/P - c) \text{ である。}$$

ここで、小野先生が導入した、「ケインズの基本定理」を紹介する。

具象化された商品 c の効用 $u(c)$

$$u'(c) > 0 \quad u''(c) < 0$$

$$\lim_{c \rightarrow +\infty} u'(c) = 0 \text{ (ここで、} \lim_{c \rightarrow +\infty} u'(c) < 0 \text{ としても本稿の理論は成り立つ。この場合、商品の絶対的飽和がある。)}$$

異時点間の消費を保証する貨幣 m の効用 $v(m)$

$$v'(m) \geq \beta (> 0) \quad v''(m) < 0$$

ここで、 m は負の値、つまり借金をしているときの効用もこの v で表せられる。

$$\lim_{m \rightarrow +\infty} v'(m) = \beta (> 0)$$

が、小野先生の言うところの「ケインズの基本定理」である。つまり、貨幣とは、全ての具体的有用的労働 (=マルクスの『資本論』の言葉) に対峙する、「将来の抽象的労働」 (=異時点間では、情報が完備でなく、現在及び将来財のどちらも選択できるという流動性プレミアムを持つ) の一つの表現である。(小野先生の言うところの、飽和することの無い「貨幣愛」の定式化である。)

貨幣の効用を若干考察していこう。

二つの階級が社会に存在する場合と、完全に平等な経済は、どちらが社会的効用が大きいのか？

前者の社会の定式化 富 $2R$ (但し、 R は > 0 としておく。) を持つ階級 N 人

富 R を持つ階級 N 人

商品の消費の効用 $u(c)$

社会全体の効用 $N \times \{u(c) + v(2R - c)\} + N \times \{u(c) + v(R - c)\}$

完全に平等な社会の定式化

富 $1.5R$ を持つ $2N$ 人の社会

富は、 $2R \times N + R \times N = 1.5R \times 2N$ で同じ

商品の消費の効用 $u(c)$

社会全体の効用 $2N \times \{u(c) + v(1.5R - c)\}$

完全に平等な社会の社会全体の効用－二つの階級が存在する社会の社会全体の効用

$$= 2N \times \{u(c) + v(1.5R - c)\} - N \times \{u(c) + v(2R - c)\} - N \times \{u(c) + v(R - c)\}$$

$$= N \times \{2v(1.5R - c) - v(2R - c) - v(R - c)\}$$

で、 $1.5R - c > R - c$ $1.5R - c < 2R - c$ と、 v が上に凹な関数であるため、
 > 0

となり、平等な社会のほうが社会全体の効用は大きい。

但し、「契約の理論」における、社会的 Incentive 概念等によって、完全に平等でなく、評価に差をつけたほうが、競争を生み、より効率的な社会が実現できる場合もある。「契約の理論」からすると、「結果平等」というのがもっとも望ましいのであろう。

次に、インフレやデフレの影響を次に考えてみよう。

今、貨幣量で M (ここでは、 > 0 としておく) の財産がある人にとって、物価水準 P の上昇は、実質残高 M/P が減少し、貨幣の効用が、

$$v(M/P)$$

であるから、 M の貨幣の効用が低下する。逆に、物価水準 P の下落は、実質残高 M/P が増加し、貨幣の効用が、増加する。

貨幣量「 $-M$ 」=負債がある場合。

物価水準 P の上昇は、実質残高、 $-M/P$ の減少をもたらし、貨幣の効用が、

$$v(-M/P)$$

であるから、 $-M$ の貨幣効用が増す。逆に、物価水準 P の下落は、実質残高 $-M/P$ が増加し、貨幣の効用が、減少する。

以上より、デフレは、「持つもの」、「持たらずもの」の差が大きくなる可能性がある。

5.消費財 c と貨幣量 M の臨界点 (=Critical Point) (小野善康先生の理論の復習その2)

前章で述べた、或る個人の具体化された商品 c の効用と、貨幣という流動性プレミアムを持った貨幣の効用の臨界点 (最大値) を求める。

$u(c) + v(M/P - c)$ を c で微分する。

そうすると、 $u'(c) - v'(M/P - c)$ となり、小野先生の「ケインズの基本定理」と呼ぶところにより、 $v'(M/P - c)$ が全ての c に対して、 0 より大きくなる。

$$\lim_{m \rightarrow +\infty} v'(m) = \beta > 0$$

一方、 $u'(c)$ は、

$$\lim_{c \rightarrow +\infty} u'(c) = 0$$

故、十分大きな c に対しては、或る個人は、具体化された商品の購入をやめ、貨幣を持つことを選択する。

以上が、小野先生の理論である。

尚、 $\lim_{c \rightarrow +\infty} u'(c) = 0$ の場合は、貨幣の流動性プレミアムに対する商品の効用の飽和であったが、 $\lim_{c \rightarrow +\infty} u'(c) < 0$ の場合は、商品の絶対的飽和である。たとえば、1足の靴しか保有していない人が、2足保有すれば効用は上がるであろう。しかし、100,000足の靴は保存しておくだけで大変であり、絶対的飽和が生じる。歴史的に見れば、農耕社会における封建制から資本主義への移行において、日本で言えば、「米」の絶対的飽和があった。現在も続く、「米」農家の減少や第2次世界大戦後に起きた農家に生まれた子供たちが「集団就職」によって、都会に出てきた事を思い出せば、実証は明らかであろう。

6. 労働時間の下方硬直性

本稿の議論を進めるために、「労働時間の下方硬直性」を仮定しなければならない。

詳しくは『完全競争均衡は一般均衡か？』（泉宏明 2003年）及び『費用関数から見た技術革新と経済社会の変化』（泉宏明 2004年）で展開した論理を参照していただきたい。

- ① 経営者が労働者を雇用する際の、「固定費の存在」
- ② 市場シェアゲームによる理解
- ③ マルクス的な、搾取を増大させるための、「労働日の延長」

以上の3つに加えて、第4の議論を加える。

「経済学者」は「競争均衡」を信じているが、経営者は、「競争」のみを信じ、「均衡」は信じていないのである。つまり、「経営者」の「合理的期待形成理論」によると、「好況はいつまでも続かない」＝「景気は循環する」から、「儲かるとき」に一生懸命働こう、また、不況になると「働けるだけ幸せ」であるから、何時までも、労働時間は短くならないのである。2004年の12月17日には、労働政策審議会（厚生労働相の諮問機関）から、「年間総実労働時間千八百時間」という政府の時短目標をなくすとする意見書が尾辻秀久厚労相に提出された。

以上の4つの議論より、資本主義社会には、「労働時間の下方硬直性」が存在する。

歴史的に見て、「労働時間」は、非常に安定した指標であることは、明らかであろう。

7. プロセスイノベーションと経済変動

以上により、私たちが、本稿において述べたい、ケインズ経済学とシュンペーター経済学の融合の土台が整った。ここで、「新結合の遂行」の一つである、「プロセスイノベーション」の社会的影響について分析してみよう。

$c_0 = f(N_0)$ 或る t_0 時点の生産関数 N_0 は、その時点の労働者数
商品 c の生産量 c_0 $f'(n) > 0$ ($n =$ 投下労働者数)

At (≥ 1) かつ、 $d/dt (At) > 0$

t ($\geq t_0$) 時点のプロセスイノベーション関数

$At \cdot f(N_0)$ t 時点の労働者 N_0 人の生産関数

M 貨幣保有量

P	物価水準	
u(c)	商品 c の効用	u の関数の特性は、4 章と同じ
v(m)	貨幣保有量 m の効用	v の関数の特性は、4 章と同じ

或る個人の t 時点の効用は、

$$u(At \cdot f(N_0)) + v(M/P - At \cdot f(N_0))$$

である。これを時間 t で微分し効用の最大値を求める。但し、簡便化のため、M/P は時間 t によらず一定としておく。(貨幣残高効果が一定と仮定する。この貨幣残高効果は、自動車産業等の場合においては重要ではないかと思われる。)

$$f(N_0) \cdot (d/dt(At)) \cdot u'(At \cdot f(N_0)) - f(N_0) \cdot (d/dt(At)) \cdot v'(M/P - At \cdot f(N_0))$$

であり、

$$d/dt(At) > 0 \quad \text{であるから、}$$

$$f(N_0) \cdot (d/dt(At)) \times \{u'(At \cdot f(N_0)) - v'(M/P - At \cdot f(N_0))\}$$

は、時間 t が大きくなるとき、

$$u'(At \cdot f(N_0)) \text{ は } 0 \text{ に近づき、} v'(M/P - At \cdot f(N_0)) \text{ は常に } \beta (>0) \text{ 以上}$$

であるから、消費者が商品の購入を行わず、流動性プレミアムを持つ貨幣の保持に勤しむこととなる。この場合、第 6 章で示したとおり、労働者の労働時間の下方硬直性により、 N_0 を FIX した場合、 $At \cdot f(N_0)$ は t の単調増加関数であるため、需要の飽和した商品の過剰生産となり、これにより、 N_0 人の内から何人かが失業しなければならない。不況の始まりである。このようにして、シュンペーターが、『経済発展の理論』で論じた通り、資本主義にとって、不況は、常なることであるのである。好況に見えた瞬間から、「プロセスイノベーションの遂行」と、「貨幣」という「流動性プレミアム」により、資本主義は、不況への道のりが始まっているのである。

この不況を打開する純資本主義的方法は、「新結合の遂行」の内、新たな商品の開発(=プロダクトイノベーション)を起こすことである。この新たな商品の開発により、新しい需要が生まれ、過剰労働が新たな商品への生産へと移動し、不況が解決されるのである。

8. 或る商品からの自然退出関数の導入 (最適プロセスイノベーション経路)

或る商品 c の生産には、当初 (t_0 時点) N_0 人の労働者がいた。(例えば日本の炭鉱夫を考えればよい。) この中から、何人か定年となり退職し、その子供は別の仕事に就いたとしよう。この場合の自然退出関数を R_t とする。

R_t は、 $t \geq t_0$ で定義され、 $N_0 > R_t \geq 0$ かつ $d/dt(R_t) > 0$ とする。

時間 t 時点の商品 c の労働者は、 $N_0 - R_t$

時間 t 時点での労働者 $N_0 - R_t$ 人の生産関数を簡便化のため、

$At \cdot f(N_0 - R_t)$ とする。

このときの、

各労働者の効用は、 $u(At \cdot f(N_0 - R_t)) + v(M/P - At \cdot f(N_0 - R_t))$ であり、

もし、 $A_t = f(N_0) / f(N_0 - R_t)$ とすると、 $R_t < N_0$ で、定義され、

$$A_t \cdot f(N_0 - R_t) = (f(N_0) / f(N_0 - R_t)) \times f(N_0 - R_t) = f(N_0) \text{ であり、}$$

$u(f(N_0)) + v(M/P - f(N_0))$ で、 M/P の貨幣残高効果を除くと、 t に無関係であり、プロセスイノベーションが起こっても、不況になる可能性は無い。このようにライフサイクルに合わせて、プロセスイノベーションが起これば問題ない。ライフサイクルに合わないプロセスイノベーションが、不況の原因であるということが明らかになった。(但し、子供が自分に合う職業が見つかるとは限らない。)

また、現在、中年以降の働く人々のリストラや過労死、自殺が大きな社会問題となっている。これを若干考察しておこう。

或る商品 c の生産の知識を受けるための教育に、労働者の年齢に関係なく、 A の固定費が必要とし、この教育を受けた年齢を、 t 才とする。この教育を受けた労働者は、退職する年齢 T_r 才まで、商品 c の生産により毎年 β を受けるとする。

t 才の人のこの教育を受けた際の見返りは、

$$\beta \times (T_r - t) - A$$

であり、教育を受ける年齢 t が遅ければ遅いほど、見返りは少なくなる。結局、高齢者ほど、新たな教育を受けてまでも従来の自分の仕事の接線方向でない別の仕事に移ることに抵抗を感じる。但し、自らに既に固定費 A の才能がある場合は、年齢に関係なく労働力移動がスムーズにできる。

9. サムエルソンの『世代重複モデル』と「貨幣経済」の危機

ここで、私が『費用関数から見た技術革新と経済社会の変化』の中で展開した『クズネッツ教授の「平均消費性向は一定である」という実証について』の復習しておく。

~~~~~ 以下 抜粋 ~~~~~

アイデアは、基本的には、ライフサイクル仮説と同じである。今、 $N$  人の労働者が、老人や子供、失業者の分まで、生産しないとイケない。つまり  $N$  人の人が、弱者  $\gamma$  人の人々の生産も行う。(  $\gamma$  を貯蓄の取り崩しで生活している老後生活者を考えると理解しやすい。)

ここでの均衡方程式は、

$$Y \text{ (社会全体の生産量)} = (N + \gamma) \cdot Y^* \quad (\text{ここで } Y^* \text{ は一人当たりの消費量})$$

$$Y = N \cdot (1 + \gamma/N) \cdot Y^* \quad N \cdot Y^* = C \text{ (労働者 } N \text{ 人の消費量) ゆえ}$$

$$Y = C \cdot (1 + \gamma/N)$$

$$C = Y \cdot 1 / (1 + \gamma/N) \quad \text{結局、長期平均消費性向} = 1 / (1 + \gamma/N)$$

労働者  $N$  人が商品  $(N + \gamma) \cdot Y^*$  分の所得を得、自分自身は  $N \cdot Y^*$  分だけ消費し、老後の生活を確保するため、 $\gamma \cdot Y^*$  分を貯蓄し、老人  $\gamma$  は、貯蓄を取り崩し、 $\gamma \cdot Y^*$  の商品を得る。

ライフスタイルや社会構造及び政策が大きく変化しなければ、 $\gamma/N$  はほぼ一定と見ていだろう。これにより、クズネッツ教授の「平均消費性向は一定である」という実証が得

られる。本稿は、ケインズが仮定した短期の消費関数に依拠しなくても成り立つ議論であるため、次章より、この $\gamma$ を取り入れる。尚、マークアップ率とは、 $C$  (労働者  $N$  人の消費量) =コストと考え、 $Y=C \cdot (1 + \gamma/N)$  が成り立ち、最低マークアップ率 $=\gamma/N$ となる。 $\gamma/N$ が損益分岐点である。また、最低マークアップ率=最低利潤率である。

~~~~~ 抜粋 終了 ~~~~~

サムエルソンの『世代重複モデル』の論文は、老人等の弱者 γ の費用を誰が負担し、どのような契約で実現するのか(サムエルソンの答えは、資本主義社会においては「貨幣」が媒介し、しかし、Political Economyの裁量によって決まる。新古典派のように「神の見えざる手」が自動的に保障してくれるというものではない。)がセンセーショナルな文体で書かれたものである。

ここで、私が最後に言いたいことに辿り着いた。本稿の『7.プロセスイノベーションと経済変動』で、或る特定の商品の一単位の追加より、人は、異時点間の交換の媒介物=流動性プレミアムを持つ「貨幣」(ここでは、「貨幣」という言葉の中に、蓄財としての「土地」や「株」も含んでいる。)を持つことを希望するために、「需要不足」が生じ、不況に突入り失業が発生していく事を述べた。そして、岩井克人先生が『二十一世紀の資本主義論』の中で規定した、「資本主義の危機」とは、「貨幣」の「流動性プレミアム」がなくなってしまうことである。つまり「貨幣」の効用 $v(M/P)$ が0になってしまうことである。この現象として、 P の異常な上昇、つまり「ハイパーインフレーション」や、「株価」の大暴落が生じる。また、当然、マークアップ率=利潤率が下がる。これにより、以前の蓄えで生活している、弱者 γ が「姥捨て」に会うのである。人は「貨幣」を信用しているから「貨幣」に裏切られるのであるという逆説に直面するのである。資本主義社会では、「貨幣」(本稿では、株や土地の投機も含む。)という「信用」で商品が買っていたが、これが一気に0の効用となる。これが平成不況と呼ばれるバブルの崩壊である。

そして岩井克人先生が指摘するように、マルクスにとって「貨幣は商品」でしかないために、『資本論』の中で恐慌論しか展開できなかったのである。マルクスの『資本論』は「貨幣論」(=価値形態論)としては、Aufheben(=止揚)されるべき存在である。

10.まとめにかえて

「20世紀は戦争の世紀である。」と誰が呼び始めたか知らないが、よく言われる。確かに、20世紀のみならず、21世紀になっても、各地で戦争や内戦、民族対立が続いている。資本主義世界になって、人々は、身分制から自由になったはずであった。そこには、「自由」という何にもかえられない「宝」があったはずであった。しかし、身分制と血縁関係(氏族関係)によって「封建制」時代には保障されていた、「姥捨て」の回避、自らの「ステータス」の維持は、資本主義世界においては「貨幣」が取って代わる。「没落の自由」と呼ばれる激しい「競争社会」(=それが、独占であろうと完全競争であろうと)の到来であった。「封建制」時代は、非常に遅い経済成長率が、次々に技術革新が起こり、生活が大きく

変わった。私が思うに、先進国の技術を持ってすれば、世界中の人々が最低限の暮らしはできるのではなからうか？なぜ戦争が続くのであろうか？

最後に、「経済学」という学問の役割として、Paul A. Samuelson が“An Exact Consumption-loan Model of Interest with or without the Social Contrivance of Money”の中で述べた言葉を引用する。

“Some interesting mathematical boundary problems, a little like those in the modern theories of dynamic programming result from the analysis. And the way is paved for a rigorous attack on a simple model involving money as a store of value and a medium of exchange. My essay concludes with some provocative remarks about the fields of social collusion, a subject of vital importance for political economy and of great analytical interest to the modern theories.” (467頁～468頁)

21世紀も20世紀同様の「戦争の世紀」にしないために、まさに“Political Economy”の重要性が「経済学」という学問に求められているはずである。私自身は、「学者」ではなく、一般の「サラリーマン」のため大きなことは言えないが、「経済学」が政策的にも何かの“Implication”を持つ必要がある。それは、「数理経済学」から離れるというのではない。「モデル」の構造を良く分かるものにして現実の一片に光を与え、有意義な提案を行っていく。これが、「経済学者」に求められていると痛切に思う。

【参考文献】

- 『経済発展の理論 上・下』シュンペーター著 塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一 訳 1977年 岩波書店
- 『資本主義の生成 ～封建制から資本主義への移行理論～』 泉宏明 2001年 進化経済学会第5回福岡大会論集
- 『ロビンソン・クルーソーの経済と現代資本主義経済 ～実物体系からの景気循環論または不均衡動学～』 泉宏明 2002年 進化経済学会第6回大阪大会論集
- 『完全競争均衡は一般均衡か？ ～予定調和の世界から自我の葛藤の世界へ～』 泉宏明 2003年 進化経済学会第7回東京大会論集
- 『費用関数から見た技術革新と経済社会の変化 ～プロセスイノベーションとプロダクトイノベーションの発生過程の解明～』 泉宏明 2004年 進化経済学会第8回福井大会論集
- 『資本主義の生成と初期の構造 ～封建制から資本主義への移行理論～』 泉宏明 1986年 大同生命保険社内論文集『雄心會論叢』
- “Demand saturation-creation and economic growth” Masanao Aoki Hiroshi Yoshikawa 2002年 Journal of Economic Behavior & Organization Vol.48
- 『構造改革と日本経済』 吉川洋 2003年 岩波書店
- 『長期不況論』 松原隆一郎 2003 日本放送出版協会
- 『貨幣論』 岩井克人 1993年 筑摩書房
- 『二十一世紀の資本主義論』 岩井克人 2000年 筑摩書房
- 『貨幣経済の動学理論 ～ケインズの復権～』 小野善康 1992年 東京大学出版会
- 『金融』 小野善康 1996年 岩波書店
- 『価値の理論』 ドブリュー.G (1977) 丸山徹訳 東洋経済新報社
- 『マルクスの経済学』 森嶋通夫 (1974) 高須賀義博訳 東洋経済新報社
- 『ミクロ経済学入門 第2版』 西村和雄 (1995) 岩波書店
- “An Exact Consumption-loan Model of Interest with or without the Social Contrivance of Money” Paul A. Samuelson 1958(December) Journal of Political Economy
- 『経済学という教養』 稲葉振一郎 (2004) 東洋経済新報社
- 『雇用・利子および貨幣の一般理論』 ケインズ(1983)塩野谷祐一訳 東洋経済新報社